

平成 22 年 4 月 2 日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007～2009
課題番号：19760427
研究課題名（和文）地域特性を取り入れた高齢者の地域居住継続のためのサポート環境に関する事例考察
研究課題名（英文）Case study on the local support environments for the elderly to continue to live in their own community
研究代表者
西野 達也（NISHINO TATSUYA）
金沢大学・環境デザイン学系・助教
研究者番号：90403584

研究成果の概要（和文）：我が国の高齢者ケアでは地域の相互扶助の重要性が叫ばれている。本研究は、ある地縁型地域において高齢者の地域居住をサポートする共助の場の実態を明らかにし、その特性と成立条件を考察した。その結果、共助として見守りや簡単な手伝いなどが見られ、専門性の高い公的ケアとの相互補完性がみられた。さらに共助の場は、元々、対象者の生活環境として定着した共在の場がその要介護化に伴って共助の役割をもつように変質していた。

研究成果の概要（英文）：It is difficult to support all of the elderly by the formal care services. This paper clarifies actual conditions of places of coexistences for informal supports by inhabitants in a town, and discusses on its characteristics and backgrounds. Hearing and on-site observations were held as for 4 persons. As results, Keeping eyes upon them were seen as informal supports. Places of them have changed from inhabitants' gathering spaces, aging of members. Local relationships and continuity of the places of coexistences are backgrounds of the informal supports. For continuity of the places, accessibility and physical settings comfortable for coexistences are important.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,200,000	0	1,200,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	200,000	60,000	260,000
総計	2,000,000	240,000	2,240,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学・都市計画・建築計画

キーワード：高齢者、地域居住、共助の場、共在

1. 研究開始当初の背景

現在、高齢化した過疎地域が急速に増加している。過疎地域における高齢者福祉サービスとその環境のあり方は、高齢者ケア環境の緊急的課題の一つと言える。しかしながら、一昨年、高齢者施設計画の10年後を見据えた将来的ビジョンを提示する著書の執筆に関わった際、おおよその施設計画論が地域特性という要素にほとんど触れていないことに気がついた。この背景には、医療福祉制度が国家レベルで規定されるため、個々の地方性や地域性を反映できないシステムとなっていることがあるように思われる。

一方、これからの高齢者ケアは地域で支えられる在宅福祉を中心としたものにシフトしていく。その拠点となるべき施設の一つとして高齢者通所施設が考えられるが、地域の状況次第では施設に求められる役割も異なってくると思われる。即ち、地域特性を考慮した高齢者福祉サービスのあり方が今後の具体的な課題として挙げられる。

2. 研究の目的

本研究の具体的目的は、広島県F市T町地区における通所施設と共助的な場の相互補完的な役割分担等の実態を明らかにすることによって、地域特性を取り入れた高齢者の地域居住継続をサポートする環境のあり方を考察するものである。最終的に地域特性を取り入れた高齢者の地域居住継続のためのサポート施設体系モデルを提示したい。

3. 研究の方法

本研究では介護保険による公助、家族等による自助以外の、地域住民らによる主に自発的な相互扶助行為等を共助として扱う。まず対象地域の広島県F市T町内の共助の全体像と人々の集まる場所(=共在の場とする)を把握した上で、次にそれらの共在の場の中で共助がみられる場(=共助の場とする)と調査対象施設Sの通所介護を併用する高齢者4名を調査対象者として選定し、同時に対象者が利用する共助の場を調査対象地として選定し、実態把握と考察を行った。具体的には、対象地域での共助の種類把握と事例考察

対象の位置づけ、対象者の地域居住サポートの実態の把握、対象者の地域居住サポート環境のモデル化、共助の場の成立条件と特性についての考察である。

調査対象地域である広島県F市T町は瀬戸内海に面した町である。鎌倉時代から始まる漁師町であったと伝えられる。鎌倉後期には海上交通の要所として栄えた。江戸時代には港湾施設が整備され、現在でも神社仏閣が数多く点在し、町家等の古い建物が数多く残る町である。しかし近年では高齢化が進み、人口5,073人に対して高齢化率は39.9%と全国平均より極めて高い(2008年1月時点)注3)。さらに人口は減少傾向にあり、高齢化率は増加傾向にある。一方、年に12回程度、各種の祭りが催されるため、町内会組織が維持されているほか日常的にも近所付き合いが町中の至る所で見かけられることから、比較的、地縁関係がよく残っている地域である。

施設SはT町市街地に立地するグループホーム(以下GHと略す)、デイサービス(以下DSと略す)、小規模多機能型事業(以下SMと略す)を提供する施設である。介護保険制度にて運営されている。建物は既存の酢の醸造所を改修した棟と増築棟がある)。前者において、GH、ショートステイ(以下SSと略す)、DSが、後者においてSMが提供されている。施設は2004年4月にGH(定員9名)、DS(定員18名)及びSSを開始した。そして2007年4月よりSM(通い定員15名、宿泊定員5名)も始めた。

事例考察の対象は、まず調査対象地域内における共助と共在の場の全体像を概観した上で、共助の場の中から施設SのDS又はSMを利用する要介護高齢者も利用する2カ所と事例考察対象者4名を選定した。A、Bさんが施設Sとお好焼店Nを利用する対象者で、C、Dさんが施設Sと祠E前を利用する対象者である。次に対象者の施設S利用日と非利用日における行動観察調査(施設内及び地域内)を行った。対象者それぞれに合わせた施設S内及び地域地図と1分毎の行為・サポート内容を記録するシートを用意し、対象者が自宅から出てきた時の様子を常時、観察記録した。一人の対象者に対して施設S利用日と非利用日の様子をそれぞれ少なくとも2回調査した(別途、事前予備調査を行った)。調査は2007年6月~2008年3月にわたり断続

的に行った。また補足的にアンケート及びヒアリング調査を実施した。アンケートでは対象者属性について把握した。ヒアリングは、適宜、施設スタッフ及び地域住民に行い対象者の生活行動・習慣等を把握した。

4. 研究成果

(1) T 町における共助の概要と調査対象の共助の場の位置づけ

共助の担い手としては地域住民、商店主、民生委員、社会福祉協議会が支援する「T 学区福祉を高める会」がある。組織体制の確立度は、T 学区福祉を高める会>民生委員>商店主、地域住民という順になるであろう。地域住民による共助については以降で述べる。まず商店主らによる共助には、例えば八百屋 O では足の悪い高齢者を座らせ店主が客の欲しい物を取りそろえて買物補助、見送りをしたり、惣菜店 Y では店主が常連客の安否確認や相談にのるという。次に民生委員(T 町に 17 名)は定期的に高齢者宅を訪問し安否確認や相談に乗り、担当高齢者に異変があった場合には施設 S か地域包括支援センターに連絡を取る体制をとっている。最後に T 学区福祉を高める会は地域の民生委員、女性会、老人クラブ、町内会連合、ボランティアの会、施設 S 施設長からなり、主に月 1 回いきいきサロンを T 町にて 8 カ所開催している。うち 1 箇所には施設 S スタッフも関わっており公的ケアとの緊密な連絡体制にある。

共助はそもそも人と人との間に成立する関係であって特定の場所を必要とするものではない。しかし本研究は構築環境の観点から共助の場の成立可能性を考察するため、固定的場所において定常的に提供されうる共助を考察対象とする。そのため、対象地域において地域住民らが定常的に集まる場所をまとめた。これらの場所にはいつでも人々が集まっている所もあれば、人々が集まる時間帯が決まっている所もあった。このような場所を「共在の場」と呼ぶことにする。これは安川が社会学者ゴフマンの分析対象である「人が他の人たちと居合わせている状態」に対して命名したものである。即ち、人々が集まっていたり居合わせている場を「共在の場」とし、それらの人々の間に相互扶助的関係がある場合に「共助の見られる共在の場

(略して、共助の場)」とする。これらの共助の提供主体は商店主と地域住民である。両者は最も組織性の弱い共助の提供主体であり、その形が捉えにくいのが最も根源的な共助と考える。共助の場のうち 2 つについて概説する。まずたまり場がある場所での共助である。例えば、酒屋 U では店内にいすがあり、夕刻になると客が自由にお酒を飲んでいく。店主は常連客の相談にのるという。次に同じくたまり場のある共助で、なおかつ施設 S 利用者も利用する場所である。本研究ではこれらを事例考察対象とした。まずお好焼店 N は商店主による共助の事例である。店は T 町市街地に立地する店舗付住居である。交通量の多い海岸沿いの車道から一本入った路地に面しているために見つけにくい。店主は女性(80 歳)で同居する実娘がお昼や夕方の繁忙時に店を手伝っている。店は先代から創業約 100 年である。お好焼の他、夏にはかき氷、冬にはおでん等も提供している。また、お菓子、ジュース等も販売する駄菓子屋的性格も持つ。次に住民による共助の事例、祠 E 前について述べる。祠 E 前は T 町で最初に人が住み始めた地区にある。祠 E 前は車道をはさんで向かい側の空地と浜を通して海が見える。この地区の家庭は戦前までほとんど漁業に関わっていた。祠 E は T 町の N 神社の末社である。N 神社は大綿津見命(海に関することを統治する神)と須佐之男命(病気を防除し産業を保護される神)を祀っている。祠 E 前はかつて漁から帰った漁師が集まる場であった。

(2) 対象者毎の地域居住サポートの実態の把握とその考察

対象者毎に地域生活サポートの実態を把握し、共助の場の役割と背景を考察する。さらにサポート環境のモデル化を行う。

① 対象者毎の公的ケアサービスと共助の場の利用実態

事例考察の対象者毎の施設 S 利用日と非利用日の居場所と行為及びサポート行為を記述したものをもとに対象者毎に施設 S と共助の場の利用実態について説明する。

A さん(女性 80 歳、独居、元鉄工所等勤務)の施設 S の DS 利用日と非利用日の様態をみると、DS では腰が痛い、横になっていることが多かった。しかし、DS が終了すると歩いて自宅に帰り、荷物を置くとそのまま約

25m 離れたお好焼店 N に直行した。その後も 19:00 頃までの間、自宅とお好焼店 N の間を行ったり来たりした。一方、非利用日には朝から自宅とお好焼店 N の間を行き来する様子が見られた。この日には午前中に訪問サービスを受けているが、その時間中もお好焼店 N で過ごしていた。結局、この日は合計 11 回お好焼店 N に行ったが、その他の非利用日にも 11 回利用していた。そして一回の滞在時間は 4 分～44 分であった (2007/6/4、5)。A さんはお好焼店 N が店であることに気を遣っているのか、たとえ短い滞在でも必ず飲み物やお菓子等を購入していた。例えば図示した両日ともヨーグルト飲料を計 3 回購入した。また夕食は必ずこの店でお好焼を食べていた。サポート行為としては、店主娘にずり落ちたズボンを上げてもらったり、お菓子の袋を開けてもらうなどの行為が見られた。さらに A さんの具合が悪い時、店主や店主娘が 20:00 頃に A さん宅を訪れて安否確認したこともあったという。

次に B さん (女性 68 歳、娘と同居) はほぼ毎日、施設 S の SM を利用するため、非利用日のデータがない。そのため 2007 年 10 月と 2008 年 1 月のデータを図示した。これらのデータ間の大きな変化は入浴の順番が変更になったため施設滞在時間が延びたことである。B さんの日課は、施設 S からの帰り道、または一旦、自宅に帰ってから再び約 500m 離れたお好焼店 N に行ってお好焼を食べ、スーパーで買物をして、途中休み休み自宅に歩いて帰る。糖尿病のため、お好焼を食べると医師に注意されるが、大好きなのでお好焼店 N に通っているとのことであった。

そして C さん (男性 82 歳、妻と同居、元漁師) は施設 S での入浴サービスと一時間程度のドライブ、訪問サービスを受けた。施設利用日も利用時間が短いため、施設 S 利用前後にも祠 E 周辺での戸外生活が見られた。祠 E は C さん宅から約 30m 離れている。C さんは祠 E 周辺で場所をいくつか転々としながら過ごしている様子が観察された。これは夏の強い日差しを避けて、日陰を選んだり、風通しの良い場所を選んでいるとのことであった。祠 E 周辺では特に誰かと積極的に会話する様子は見られなかったが、通り過ぎる人々と軽い挨拶を交わすことが多く観察された。また周囲を見回したり、祠 E 前で夕刻、

仕事を終えた漁師や近所の人々が会話している場に居合わせる場面が観察された。

最後に D さん (女性 97 歳、独居、元食堂経営) 宅は祠 E のすぐ裏手にある。D さんの日課は、毎朝、遠縁のお寺で朝食をいただくことと午後に自宅から約 200m 離れた埠頭に散歩に行くことである。施設 S 利用日には、お寺と病院、DS 以外の外出はなかった。一方、非利用日には朝夕に祠 E 前に 15 分程度いたが、特に誰かと会話することもなく、物静かに皆が会話するのを見ながら座っていた。

②対象者毎の共助の場の役割・背景の考察

次に対象者毎の共助の場の利用の特徴、サポート内容等を整理し、共助の場の役割とその背景を考察する。

A さんは施設 S 利用日、非利用日ともにお好焼店 N に頻繁に出入りしていた。従って A さんにとってお好焼店 N の役割は単に食事提供の場であるのみならず、居場所、社会的接触の場であると考えられる。また、店主らによる見守りやズボンを上げるなどのサポートも受けていた。この背景として店主と A さんが小学校の同級生であり、また近隣に住まう地縁もあると考えられる。また頻繁にお好焼店 N に通う要因として、一人暮らしの不安もあったと思われる。

次に B さんも日課的にお好焼店 N を利用していた。しかし B さんがお好焼店 N に来るのは一日 1 回であり、お好焼を食べるのが目的であった。また特にサポートは受けていなかった。あえて言うと、B さんは失禁癖があるため他店では嫌がられることもあるが、お好焼店 N ではそのような差別がないことが形のないサポートと言える。2008/1/10 には A さんとの会話も見られたことから、B さんにとってのお好焼店 N は食事提供、社会的接触の場と考えられる。

そして C さんは施設 S 利用日、非利用日ともに祠 E 周辺での生活が多く見られた。また通りすがりの人々との挨拶も多く見られたことから、C さんにとって、この場所の役割は居場所、社会的接触の場と言える。また祠 E 前に集まる人々との積極的な会話はほとんどなかったが、彼らは C さんの行動パターンを熟知しており、「見ていないふりをして見ると」という見守りのサポートを受けていると考えられる。この背景として、この場所に集まる人々のうち 2 人が元漁師仲間であること

や近隣であるという地縁があると考えられる。

最後にDさんは祠E前にはあまり姿を見せなかった。積極的な会話等は見られなかったが、祠E前に人々が集まる時に脇の方に座っている場面が見られたことから、Dさんにとって、この場所は居場所の選択肢の一つであり、また社会的接触の場でもあると考えられる。サポートとしては祠E前に集まる人々からDさんを気遣う発言が聞かれたことから、彼らによる見守りを受けていると考えられる。

以上、少なくともA、C、Dさんにとってお好焼店Nや祠E前が共助の場として機能していると考えられる。そして対象者に対するサポート内容としては、主に見守り、簡単な手伝いが見られた。これらの背景として地縁、元同業者、同級生であることなどが挙げられた。また場の役割としては食事提供、居場所、社会的接触が考えられた。従って、公的ケアサービスの隙間を埋める形の共助の役割は在宅要介護高齢者が地域居住を継続する上で決して小さいものではないと言えよう。

③対象者毎の地域居住サポート環境モデル

公的ケアサービスとしては、通所介護では、バイタルチェック、入浴介助、マッサージ、社会的接触、排泄介助、また訪問介護では自宅掃除、投薬管理、洗濯、食事準備、通院介助等が見られた。つまり、専門性が高いものや手間のかかるものが公的ケアサービスによってサポートされていた。一方、共助としては施設を利用していない間の見守り、簡単な手伝いが主であった。従って、共助と公的ケアサービスとの相互補完性が確認された。ちなみに共助による見守りが見られたA、C、Dさんの自宅と共助の場の距離は20～30m程度であった。一方、見守りが見られなかったBさんは自宅とお好焼店Nが約500m離れていた。従って、自宅と共助の拠点場との近接性が見守りの条件と言えよう。

また、対象者の中で施設利用が最も早かったDさんでも2006年1月からの利用であることを考慮すると、元々、対象者の地域生活の場として共助の場が定着していたところに、公的ケアサービスの利用が始まることによって、公的ケアサービスと共助の相互補完性が成立したのと考えられる。

(3)共助の場に関する考察

お好焼店Nと祠E前に着目し、共助の場の成立条件を環境的特性の観点から考察する。

①共助の場の成立条件

お好焼店Nや祠E前は、元々、共助を目的とした場ではない。お好焼店Nは飲食・駄菓子屋であり、祠E前は歴史を遡ると漁師達の会合の場であった。一方、共助が見られたAさん(居住歴57年)、Cさん(同82年)、Dさん(同88年)らはいずれも要介護となる以前から共助の場の近辺に居住し、日常的にこれらの場を利用していた。つまり、これらの場が連綿と持続することにより、各対象者の生活環境として定着し、やがて対象者の虚弱・要介護化に伴って、共助の役割も兼ね備えるように変質したのである。また共助の背景として、対象者と店主が同級生(Aさん)、元同業者(Cさん)、また近くに住んでいる(A、C、Dさん)という地縁関係が挙げられた。これらはT町特有の地域的要因と言える。一方で、お好焼店Nや祠E前のような人々が集まりうる場所、即ち共在の場があるために共助が見られたことには一般応用性があると思われる。そして本稿における共助の場とは、共在の場が時間的に持続する中で共助機能をも併せ持つようになったものであると考えられる。

②共助の場の環境的特性

共在の場が共助機能を併せ持ち、共助の場となるためには時間的持続が必要と考えられたことから、共在の場が持続されるための環境的特性について考察する。

まず立地環境を比較すると、お好焼店Nは路地裏に面しており、一方、祠E前は海に面しており、対照的で共通点はない。次に社会的環境をみると、お好焼店Nはお店であり、祠E前はオープンスペースであるため、どちらも誰でも入っていけるアクセシビリティを持っている。そして、人間的環境を見ると両者とも必ずしも要介護高齢者ばかりでなく、いろいろな人々が混在している。また、お好焼店Nには店主、祠E前では東隣の自営業主(男性60歳)が祠E前の気配りをしており、いわゆる場のマネージャがいることが挙げられる。この場のマネージャが見守りなどの中心的存在となっていた。また、お好焼店Nではお客の65%(07/6/4)が女性であったのに対して、祠E前に集まる人はほぼ全員、男性であった(07/9/13、祠E前で座った13

人中 D さん以外全員が男性であった)。しかし、お好焼店 N はお店であり、誰でもお客としてアクセス可能であるものの、路地裏に面した立地であるため、一見さんはなかなか見つけにくい。また祠 E 前もオープンスペースではあるが、この場所に集う人々が半ば固定しているため、一種の入りがたさがある。実際にお好焼店 N に来るお客のほとんどが常連又は顔見知りであり、祠 E 前に集う人々も近隣者であった。即ち、両者とも、一見、誰でもアクセス可能であるが、実際は構成員が半ば固定（サロン化）していた。

最後に物理的セッティングの特性をみる。まず、お好焼店 N について。お好焼店 N ではお好焼を焼く鉄板机が重要な役割を果たしていると考えられる。なぜならば、この机を囲んで店主がお好焼を焼くのを待ったり、お好焼きを食べることが、他者どうしても居合わせるきっかけとなるからである。即ち、他者どうしをゆるやかに共在させることが可能となっている。一方、店舗入口側に別机があることによって、鉄板机から離れるという選択も可能である。しかし、店舗内部は小さな空間なので、完全に別離するわけではなく、時に両者一体となった会話も見られた。即ち、他者どうしをゆるやかにつなげられる求心的な鉄板机と離れられる別机の選択性がこのお好焼店 N における共在の持続を可能としているものと思われる。次に祠 E 前について。ここでは祠 E を背にして海の方へと向く平行な椅子のセッティングが多く見られた。即ち、この場所に集まる契機として祠が象徴的な求心性をもつものの、物理的には海に向かって平行に座る背面壁として機能しているものと捉えられる。会話の輪ができてはいるが、全員が顔を向き合っているわけではなく、前列の一人は海の方を向いている。このように一方向への強い向きがあると、一つの集まりでも、いつでも会話に参加することも離れることもできるような平行的な体勢をとることができるものと思われる。そしてこの平行性が半ば固定化した構成員や時には他者をもゆるやかに共在させるセッティングであると考えられる。なお、この方向性は海に向く場所の特性に強く規定されたものである。

(4)まとめ

①共助としては見守りや簡単な手伝い等が

見られ、専門性の高いケアを中心とする公的サービスとの相互補完性を確認した。

②そして共助の役割は在宅要介護高齢者が地域居住を継続する上で小さいものではないと考えられた。

③次に共助の場は、元々、各対象者の生活環境として定着した共在の場が、対象者の虚弱・要介護化にともなって、共助の役割も兼ねるように変質したものと考えられた。

④その背景として、地域的条件である地縁の要素と一般的条件である共在の場の持続が考えられた。

⑤そして、その共在の場が持続可能な環境的特性を考察した。

⑥最後に地縁型地域においては現存するコミュニティによる共助を有効活用するための支援が重要と考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

1. 西野達也：軀に暮らし続けることを可能にしている人・まち・サポート、査読無、高齢者住宅財団、いい住まいいいシニアライフ Vol. 94、pp. 2-11、2010. 1
2. 西野達也、桑木真嗣：高齢者通所施設利用者の生活からみたある地縁型地域における地域住民らによる共助のみられる共在の場に関する事例考察、査読有、日本建築学会計画系論文集 No. 642、pp. 1707-1715、2009. 08

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西野 達也 (NISHINO TATSUYA)

金沢大学・環境デザイン学系・助教

研究者番号：90403584